



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルーシとモンゴル : モンゴルによるルーシ支配の始まり
Author(s)	栗生沢, 猛夫
Citation	西洋史論集, 5, 1-26
Issue Date	2002-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37449
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_1-26.pdf



ルーシとモンゴル ——モンゴルによるルーシ支配の始まり——

栗生沢 猛 夫

はじめに

バトゥの率いるモンゴル西征軍は、一二三七—一二四一年にルーシを襲った後、西方にむかい、一二四二年三月アドリア海沿岸にまで達した後突如兵を返した。西征軍の多くはモンゴル高原へ戻ったが、バトゥ直属の一軍はヴォルガ下流域に留まって、そこにいわゆるキプチャク・カン国を築いた。ルーシはキプチャク・カン国の支配を受けるようになった。

もっともこの支配の実態についてはあまりよくわかっていない。「野蠻」で「残酷」なモンゴル人の「過酷」な支配に、ルーシ人は塗炭の苦しみをなめさせられたと語られることが多い。しかしこれではもちろん事実を伝えられない。本稿はこの問題を「モンゴルのルーシ支配」の開始期に焦点をしばって、立ち入って考察することを目的とする。

この「支配」について、史料を検討する前には何も言えないというわけではない。さしあたり次の点は確認しておいてよいだろう。第一

に、モンゴル人はルーシを「征服」した後、ルーシに移り住み、ルーシ各地のそれまでの支配体制を廃棄し、自らが直接支配するというこ

とはしなかったという点である。つまり、少なくとも森林地帯の北東ルーシに関しては「間接統治」が行われたのである。したがって問題は、この「間接統治」の内実はいかなるものであったのかということになる。第二に、キプチャク・カン国は最初の間は、カラコルムを首都とするモンゴル帝国の一部を構成していたと考えるべきで、その意味では、そのルーシ支配もある時期までは、帝国との関連の中で捉えられなければならないということである。

以上の二点を確認した上で、以下に初期のルーシ支配について具体的に見ていくことにする。

一 最初の人口調査

バトゥ麾下のモンゴル人は、ヴォルガ下流域に本拠を定めた後、ルー

シにたいする支配機構の樹立を急いだようにはみえない。キプチャク・カン国の成立後しばらくの間、かれらがルーシをどう支配したのかについての記述は少ない。侵入後しばらくは支配が具体的な形をとらなかったとする点では、諸史家の見解は一致している。おそらく、侵入の際の国土の破壊により疲弊しきったルーシは、しばらくの間は放置されていたと考えられる。モンゴル人としても、侵入時にルーシから奪えるだけ奪い取っていたであろうから、当分の間は、これ以上何も獲得することを期待できなかったのかもしれない。

ただ、すでに一二四〇年代にルーシの諸公がサライ（首都、というよりバトゥ・カンの本営）あるいはモンゴル帝国の首都カラコルムに赴いて、恭順の意を表明し、自己の公位・公国支配権を安堵してもらっていたということは指摘されなければならない。^③たとえば、一二四二年―一二四三年（世界創造紀元六七五一年）、ウラジーミル大公ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ（シチ河畔の戦いで倒れたユーリー大公の弟）はバトゥのもとに出かけ、また息子のコンスタンチン公をカラコルムの大カーン（ただし当時はウゲデイ・カーン亡き後、次のカーンはまだ決まっていなかった）のもとに派遣している。^④またヤロスラフ大公以前に、あるいはほぼ同時に、アレクサンドル（ネフスキー）公がバトゥのもとへ、またリャザン公オレーグもカラコルムへ向かっている。^⑤それゆえかりに、支配がこの時期具体的な形をとっていなかったとしても、ルーシがモンゴルの支配下にあったこと自体を疑うことはできない。

また、すでに一二四〇年代に、モンゴルがルーシを現実に支配しよ

うとしていたことを示す記録も全くないわけではない。モンゴルによる徴税のための「人口調査」が行われたとする記事がある。最初の記事は一二四五年にかかわる。この年キエフの住民がバトゥの命令で数えられ（sochasha ia v chislo）、貢税（ダーニ）を課されたという。^⑥

ローマ教皇使節、フランチェスコ会士ブラノ・カルピニも、おそらくモンゴルからの帰路ルーシにあったとき（一二四七年夏のことであろう）、「一人のサラセン人〔護訳では「イスラム教徒」〕がグエク・カーンとバトゥのもとから遣わされてルーシにやってきて、住民の一部を連れ去り、他の者の数を調べたと伝えている。^⑦ただこれらの記述は、おそらく南西ルーシにのみ、それもごく一部の地域にかかわるものであったと推測され、北東ルーシをも含む、全ルーシにおける本格的なモンゴル支配機構の構築とは考えられない。また、二つの「人口調査」がサライとカラコルムのどちらのイニシアティブでなされたのか、双方の関係はどうなっていたのかについてははっきりしない。

その意味で本格的な変化は、一二五〇年代に入ってからおこる。北東ルーシにおいても「人口調査」が行われるようになるのである。すでに『元史』巻三（本紀第三、憲宗）の三年（一二五三年）の項に、モンケ・カーンが「書記のベルケ」を「幹羅思において戸口」を数えるために遣わした、という記事がある（「幹羅思オロス」というのはルーシのことである）。^⑧ルーシにこれをそのまま裏づける記録は存在しないが、後述のように、ありえないことではなかった。また『ノヴゴロド第一年代記』の一二五八―一二五九年の項には、このとき同市に派遣された調査人の、主要な人物がベルカイないしベルカといった

と記されている（後述）。何らかの理由で数年の時をおいて実施されたと考えることもできよう。^⑨

ルーシでは『ソフィヤ第一年代記』に、一二五五年の冬、タタールの「調査人 *chislenis*」が現れ、ルーシ全土を調査したという記事があり、後代のいくつかの年代記に引き継がれていくが、この年に実際に大規模な人口調査が行われたとは考えにくい。バトゥが没し（一二五五年）、跡を継いだといわれるサルタクもまもなく世を去っているからである。

より確定的な記述は『ラヴレンチー年代記（スーズダリ年代記）』に見られる。その一二五七年の項に次のように記されている。その年の冬「調査人がやってきて、スーズダリ、リャザン、ムーロムの全土を数え、十人長、百人長、千人長、万人長を定め、オルダーへ去った。ただ聖母と主「なる神」を見つめる修道院長、修道士、司祭、聖歌合唱人は数えられなかった」^⑩。

この記事は、それ自体のうちに説明を要すべき多くの問題を抱えているが、それについては後述するとして、さしあたり次のことを指摘しておきたい。まず、『ノヴゴロド第一年代記』によれば、この年調査はノヴゴロドでも行われたということ、つぎに、『ラヴレンチー年代記』では、調査は翌一二五八年にウラジミール地方に拡大され、さらに同年、ないし『ノヴゴロド第一年代記』によれば、一二五九年には、ノヴゴロドでも再び調査が行われたということである。^⑪したがってこのときの調査は、おそらくは北東ルーシ全域を対象にした、本格的なものであったと考えられる。

次に、この調査は、ルーシだけに関わるものではなく、キプチャク・カン国（ジョチ・ウルス）全体に関わるものであった。アルセンによれば、同じころハザールリア（クリミア）、オセッソ（アラニア）、キプチャク（ポロヴェツ？）、そして「闇の国々」（ヴォルガ・ブルガールやシベリア地方か？）においても、調査が行われたという。^⑫

さらに、この時の調査は実はキプチャク・カン国のみならず、モンゴル帝国全体に関わるものであった。これはモンケがモンゴルのカーンとなったことと関係がある。モンケ治世（一二五一―一二五九年）の、一二五二年には中国で、翌一二五三年にはイランで、そして一二五四年にはアルメニアで、人口調査が行われたことが伝えられている。^⑬モンケは即位とともに、全帝國的な人口調査を行おうとしたと考えられる。北東ルーシの場合もその一環と考えることができる。ただし、モンゴル帝国とキプチャク・カン国との関係については、はっきりしたことはわかっていない。研究者のなかには、すでにウゲデイ・カーンの死（一二四一年）後まもなく、つまり、キプチャク・カン国が成立してすぐに、独立的な存在となったことを説く者がいる一方、帝国の一体性がより長く続いたと考える研究者もいるからである。^⑭したがって、この時の調査が全帝國的なものであったことはほぼ確かと考えられるが、実際にどのようなようになされたかを明らかにすることは難しい。^⑮そして最後に、この時の全帝國的な調査の基本的単位は世帯（*dyor*）であったと考えられることである。この点に関しては、研究者によって見解の相違があるが、ルーシの諸史料は世帯が単位であったことを窺わせている。^⑯

さて、『ラヴレンチー年代記』の一二五七年の記事に戻ろう。

この記事で注目されることはいくつかある。たとえば、修道院長や修道士らが「数えられなかった」とされている点がその一つである。これはつまり、モンゴルが教会関係者を徴税の対象からはずしたということがあるが、これについてはモンゴル支配下の教会の状況をめぐる問題として、特別の考察の対象とすべきであろう。ここではモンゴルが一般的に、諸宗教・聖職者にたいしおおむね「寛容」な態度をとったこと、ルーシの場合、これにより教会当局はモンゴル軍の侵入やその後の度重なる襲撃の被害は大いに嘆いたにせよ、少なくともある時期までは、モンゴル支配を受容する態度をとったこと、つまり聖職者を中心とする年代記その他の文献の著者たちに、反モンゴルの態度が鮮明になるのは一定時期を経た後のことであること、を指摘しておくに留めたい。⁽²⁰⁾

次に問題となるのは、「調査人」と呼ばれる者たちがどこから、誰によって派遣されたかということである。つまり、モンゴルのカーンからなのか、それともキプチャクのカンからなのかということであるが、これについては先に触れたようにはっきりしない。このときの人口（戸口）調査は、全帝國的規模で行われたと考えられるので、カラコルムのモンケ・カーンによるものであるとみるのが妥当であるが、ただ、「オルダーへ去った」とあるように、サライへ戻ったと考えることもできる（ルーシでオルダーといえば、通常はキプチャク・カン国をさした）。つまり、サライから派遣された可能性もでてくるのである。この問題は、当時のカラコルム・サライ関係をどうとらえるか

ということと密接に関係している。ここでは、このころのカラコルムとサライの関係が比較的良好であったという事情（注17を参照）を勘案して、「調査人」たちはサライから送られてきたが、おそらくは、カラコルムからの指令の上でのこと、あるいは帝国とカン国の協議の上のことであったとっておきたい。

もっとも面倒かつ重要な問題は、これらの「調査人」たちが「定めた」といわれる、「十人長、百人長、千人長、万人長」が一体どのような存在であったのかという点である。かれらはモンゴル人（あるいはモンゴル人がステップから連れてきたチュルク系の人々）であったのか、それとも、ルーシの住人であったのかがまず問題となる。次に、それらの役職の性格、その職務内容が問われてくる。

この問題に本格的に取り組んだ最初の研究者は、おそらくA・N・ナソーノフであろう。かれによれば、これはモンゴルがルーシに導入した軍事・政治組織である。万人長、千人長らはこの組織の指揮官グループで、モンゴル人ないしタタール人である。かれらは同じくモンゴル人である「調査人らとともに」、ルーシへとやってきたが、「調査人」らが人口調査の仕事を終えて帰国したのに対し、引き続きルーシに留まり、「一部は地方住民から」徴募された特別の部隊を組織し、ルーシ支配にあたったという。そして、これらの組織全体を率いたのがいわゆるバスカクで、これらのバスカク部隊はルーシ国内の所々で治安維持、徴税業務の遂行補助などのために用いられた、とする⁽²¹⁾（バスカクについては別稿で検討した⁽²²⁾）。

ナソーノフの見解は、その後、幾人かの研究者の批判をあびる。た

たとえば、M・N・チホミロフはモンゴルの「調査人」らが作った組織を軍事的なものとする⁽²³⁾ことに反対して、それは徴税を目的とした財政的な組織であったとする。V・V・カルガロフも、チホミロフの見解をより説得的とする。かれによれば、万人長、千人長らが「調査人らとともに」やってきた、つまりもっぱらタタールやモンゴル人であったとする根拠はどこにもなく、さらに、万人長らを軍事組織の指揮官層とする根拠もないという⁽²⁴⁾。またM・D・ポルボヤリノヴァも、バスカク部隊の基本的部分がルース人により構成されているとする見解には異議をとねえ、モンゴル支配の初期において強制的に徴募されたルース兵は、むしろ国外で使用されたとする⁽²⁵⁾。またアメリカの研究者Ch・J・ハルペーリンは、カルガロフの見解を好意的に紹介する一方で、それが必ずしもソヴィエトの歴史家の受け入れるところとはなっていないとしている⁽²⁶⁾。

最近の論者では、A・P・グリゴリエフがやはり反ナソノフ的な立場から説明を加えている。それによると、キプチャク・カン国をふくむモンゴル帝国では、軍事・遊牧的モンゴル・チュルク貴族層の間に、カン、万人公 *khan tny*、千人公 *khan tsyach*、百人公、十人公そして兵卒「レーン」所有者 (*lenik*) からなる封建的ヒエラルヒーが形成された。これらの諸公が先頭に立つ組織は、遊牧経済をいとなむ「軍事行政的」組織であり、それらはカンにたいし、それぞれ一万人から十人までの戦士を提供した。他方モンゴルの支配下に入った地域でも、同様の組織が形成されたが、それらは遊牧地帯のそれとは異なっていた。ルースのような「征服された農業国において家々

が記録されたとき、計算法は従来通りのままであった。その地域の住民層から十人長、百人長、千人長、万人長が任命された。しかしこれらの責務は、モンゴル・チュルク人封建領主層の職務とは根本的に異なっていた。かれらは自らの下に登録された家々のグループの、それそれからの租税の納入具合を監視しなければならなかった。これらのグループの家々は、一定数のオルダーの兵員を扶養すべく糧食、飼料、それに現金を提供しなければならなかった⁽²⁷⁾。

十進制的組織の目的を財政的なものとし、十人長らをルースの住民から任命され、それぞれの住民グループからの貢税の徴収の責任をもつ人物と考える、V・L・エゴロフも同様の立場に立つ⁽²⁸⁾。

ところで、上の十人長から万人長にいたる十進制的な制度は、モンゴルが初めてもちこんだ制度とみることはできない。ヴェルナツキイは、千人組以下の制度がモンゴル以前にも存在したことを忘れたかのような議論を展開するが、それは正しくない⁽²⁹⁾。たしかに、モンゴル人社会には十進制的な組織原則は存在したが、それは東スラヴ人社会にも早くから見られたのである。東スラヴ人社会における十進制制度の起源と性格については古くから議論されてきた。ここでそれにたちいることはできないが、その起源を公権確立以前にまで遡らせ、それが土着的で人民的な性格をもつことを主張したM・F・ウラジミルスキー・ブダーノフと、それに反対して、公権力によるその組織化を主張したA・E・プレスニャコフの帝制期の二人の学者の間の対立は、ソヴィエト時代にはいっても、たとえば、M・N・チホミロフとS・V・ユシコフの立場の対立として、基本的には続いているとみることができる⁽³⁰⁾。

本稿にとって重要なのは、古くからのこの組織がモンゴル支配期の北東ルーシにおいても存在し続けたのかどうか、またその場合、モンゴルの採用した十進制制度はルーシのそれとどのような関係に立ったのか、という点である。

この点に関しては、L・V・ダニローヴァの共同体研究が役にたつ。かの女によれば、百人組や十人組の組織は、発生学的には、全人民が武装し氏族制の原則に基づいて組織された軍事民主制の時代に遡り、それらの長は、その後の封建国家形成期の初期にも、都市や農村共同体の軍事・行政権力を代表して、国家の行政システムにおいて重要な役割を果たした。その後、封建支配の諸制度が整備され、自由な共同体が衰退するにつれて、その社会的地位は下がるが、存在自体は続いた。モンゴル・タタールの征服者が行った「改革」は、百人組や郷（ヴォロスチ）への住民の区分体制を複雑化し、歪めることとなったが、かれらがこの十進制制度を改めて採用、ないし維持したことにより、今や至る所に、つまりそれが以前は存在しなかった地方にも、導入されるようになった。他方では、以前には高かった百人長の社会的地位の、一層の低下が見られることになる。かれらは今や、もっぱら共同体員からの租税の徴収と諸義務の遂行に責任をおう存在となった。北東ルーシでは一四〜一五世紀になっても、百人組組織は郷組織とともに併存し、百人長、五十人長、十人長らは郷共同体の代表であるとともに、公権の行政機構の一端をも担っていた³¹⁾。

以上のように、ダニローヴァはモンゴルの採用した十進制制度が、ルーシ古来の制度の維持・変質に一定の影響を与えたことを主張した

が、これに反対することは難しい。ここでは単に、いくつかの点を付け加えるにとどめておきたい。まず、ルーシで問題となる十進制制度というのは、もっぱら千人長や百人長以下の組織であるということである。つまり、十進制制度は古くから存在したが、万人組組織（*thuset,ルーシの史料ではтыся*）は、モンゴル後に初めて知られるようになったと考えられる。万人組についてここで詳述することは避けるが、これがその後長期にわたって存在したようにはみえない。千人組についてもそうだが、百人組の場合には一層、以下に記すように、比較的長期にわたって存続するので、モンゴルの影響を過度に強調することは控えるべきであろう。

次に、千人長（*тысяцкий*）はノヴゴロドでもっとも長く（一五世紀後半モスクワに併合されるまで）、モスクワでも一四世紀後半まで知られているが、その職務内容については、それぞれの地域ごとに、また時代の推移との関連で、慎重に検討されなければならない。とくに、モンゴル以後のモスクワでその職務内容に変化が起こったかどうかは、問題となりうるが、これまでそうした問題提起を行った研究者は、ほとんどみられない³²⁾。さらに、百人組（*сотня*、あるいはそれに関連する区分は、ダニローヴァをまつまでもなく（かの女はヴォロツキー郡では一六世紀後半まで維持されていたとする）、より長期にわたって続くが（たとえば、商人団体ゴスチンナヤ・ソトニヤ、スコナヤ・ソトニヤなどの形で一八世紀初めまで存在したとみることできる³³⁾。また都市でも、ポサード共同体ポサーツカヤ・ソトニヤが一八世紀まで存在した）、これも、モンゴルのそれとの関連性は研究史上全く指摘

されていない。全体として、モンゴル以降のルーシにみられる十進制制度は、基本的には古来からのルーシ的伝統の枠内で、またその線上での変化として、捉えた方がよいように思われる。この点に関してモンゴルの影響を過度に強調することは、控えるべきであろう。モンゴルの制度が何よりも遊牧軍事的性格を有していたのにたいし、農業中心のルーシでは、それはより包括的な社会・生産組織という側面をも有していたことを、忘れるべきではあるまい。

『ラヴレンチー年代記』一二五七年の記事に関連して、最後にふれておきたいのは、反抗ないし抵抗の問題である。上の記事では、スーズダリ、リャザン、ムーロム地方では、このときの「人口調査」に際して、住民の側からの反抗があったとはまったく記されていない。しかし、次節以下に記されるように、タタル税導入期のルーシにおいては、少なからぬ抵抗の事例が知られているのである。このときも、記述がないからといって、「人口調査」がスムーズに行われたときめつけるわけにはいくまい。ここで想起されるべきは、この記事を伝える『ラヴレンチー年代記』は、この時期の部分については、ときのウラジーミル大公アレクサンドル・ネフスキーを中心とする層の者たちの立場から書かれていた、と考えられることである。⁽³⁵⁾確かに、この時期の政治状況は不安定であったので、今日に伝わる年代記の当該部分の記述も、そう単純に、特定人物やその集団の利害が表明されていると決めつけてしまうことは正しくなからう。たとえば、アレクサンドルの死後、大公位を継いだ弟のトヴェーリ公ヤロスラフは、アレクサンドルと政治路線を異にし、ときに敵対していたことが知られている。

したがってヤロスラフ治世に、先の年代記記述に手が加えられた可能性はある。しかしたとえそうであっても、その後、アレクサンドルの子供ら（ドミトリーとアンドレイ）が大公となったときに、再び、オリジナルに近い形に戻されたとも推測されうるのである。

したがって、『ラヴレンチー年代記』のこの箇所は、基本的にはアレクサンドルの立場を表していた、と考えることができる。それゆえ、ここに反抗の記述がないことは、実際にそれがなかったことを示すものではなく、後述するように、タタル支配にたいし、恭順政策をとり、タタル税の導入をむしろ積極的に推進したアレクサンドルの立場を、表わすものであった可能性があることを、指摘しておきたいのである。年代記者はここで、あったかもしれない反抗について、記述しなかった可能性があるということである。

以上、キプチャク・カン国のルーシ支配の開始期における「人口調査」についての記事は、ほとんど北東・北西ルーシに関するものであった。「人口調査」がそれ以外のルーシで行われたという、はつきりした情報はない。南西ルーシがキプチャク・カン国の直接統治をうけたからか（ヴェルナツキー）、それともモンゴル軍によるキエフ以西の征服がバトゥ一人の手で行われたために（西方遠征に参加したチンギス・カン一門の他の皇子たち、たとえば、ゲュクやモンケらはキエフ征服後西進せず東方へ去った可能性がある）、この地から徴収される税に関しては、モンゴル帝国、つまり他のチンギス・カン一門のことを考慮に入れずに、バトゥ一人の独占が許されたことで、特段の「調査」を行う必要がなかったからか、種々考えられるが、はっきりしな

い。いずれにせよ、ステップに近い南西ルーシは、北東ルーシより厳しい支配をうけたことが予想されるが、ただキエフ地方と、さらに西方のガリーチ・ヴォルイニ地方などではまた、異なる側面もあったであろうことが推測される。

二 ノヴゴロド、一二五七—一二五九年

ルーシはモンゴルの人口調査を黙って受け入れたわけではなかった。これについて伝える史料は乏しいが、一二五七年の夏に、ヤロスラヴリで在地公を中心とした反抗があったことを窺わせる、言い伝えが存在したことが知られている⁽⁴⁷⁾。

同年の冬から一二五九年にかけてのノヴゴロドでは、はっきりとした反抗の事例が伝えられている。『ノヴゴロド第一年代記』一二五七年（六七六五年）の項に、次のように記されている。

「タタールがノヴゴロドで、タムガ〔関税〕とデシャチーナ〔十分の一税〕を望んでいるという忌まわしき噂が、ルーシから入ってきた。夏を通じて人々が騒いだ……その冬タタールの使者たちが、オレクサンドルとともにやってきた。ヴァシーリーはプルスコフに逃げた。そして使者たちはデシャチーナとタムガを要求し始めた。しかしノヴゴロドの人々はそれに応じず、皇帝への贈り物を与え、かれらを平和裏に帰らせた。」⁽⁴⁸⁾

これはすでに示したように、一二五七年に「ルーシ」すなわち、おそらくは北東ルーシ（ロストフ・スーズダリ地方）で、人口調査が行

われた際のことであろう。この「ルーシ」からノヴゴロドへも調査人が現れるらしいという噂が入り、ノヴゴロドの人々の間に動揺がおこったというのである。古くから交易で栄え、自立的で独自の政治的伝統を築いてきたノヴゴロドは、表面的にはタタールの支配を受け入れたとはいえ（ノヴゴロドはバトウの侵入の際には、直接の被害をうけてはいなかった。したがって、モンゴル人もこれまでノヴゴロドには姿をみせていなかった。おそらくこのときが初めてのことであった）、いざその課税体系への組み込みが現実のものとなったとき、それに反対して騒ぎだしたわけである。

注目すべきは、このときウラジーミル大公アレクサンドル・ネフスキー（年代記の「オレクサンドル」）が、タタールの「使者たち」（調査人ら）とともにノヴゴロドにやってきていることである。かれらを助けて調査、課税作業を実施させようとしたと考えられる。しかしタタールと大公の意図は実現されなかった。人口調査と徴税は実施できなかった。ノヴゴロド民の反対活動が、武力で抑え込むことのできぬほどに強力であったと考えられる。タタールの「使者たち」は、自らの君主（皇帝（ツェーサリ））への贈り物を与えられただけで、満足するよりほかなかったのである。

このときのノヴゴロド公は、アレクサンドルの息子の一人ヴァシーリーであったが、かれが「プルスコフ」（プスコフ）へ逃亡したということは、かれ自身がノヴゴロド民の反対運動に何らかの仕方に関与していた、ということの意味しているであろう。アレクサンドル大公は息子のヴァシーリーをプスコフで捕らえ、「下流地方」すなわちウ

ラジーミル・スーズダリ地方へと連行し、さらに、かれの従士団（ドルジーナ）とその指揮官を処罰している。「ある者は鼻を削がれ、ある者は目をくりぬかれた。ヴァシーリーを惡へと引き込んだからである」と年代記は伝えている。⁽³⁹⁾アレクサンドル大公のこのような行為をどう理解するかは、難しい問題である。大公のキプチャク・カンへの忠勤ぶりを強調することもできようし、逆に、大公がわが子とその従士団を罰することを余儀なくされた、その困難な状況の方を重視することもできる。アレクサンドル・ネフスキーの行動の評価は、かれの全生涯を時代の広い枠組みにおいて初めて可能となるであろう。

このように、一二五七年にはモンゴルの調査人は引き下がらざるをえなかったが、かれらはノヴゴロドからの徴税を諦めたわけではなかった。『ラヴレンチー年代記』の翌年（一二五八年）の項に次のように記されている。

「同年、諸公がタタール人のもとへ行った。オレクサンドル、アンドレイ、ボリス、トヴェーリのヤロスラフ〔の諸公〕である。〔かれらは〕ウラヴチ〔カン〕と〔タタールの〕すべての軍司令官らに敬意を表し、己が祖国へ帰国を許された。」⁽⁴⁰⁾

これは先の『ノヴゴロド第一年代記』にはみられない記述である。もしこの『ラヴレンチー年代記』の記述を信じることができるとすれば、一二五七年のノヴゴロドにおける騒擾の後、アレクサンドルは、自ら進んでか、あるいは呼びだされてか、諸公を引き連れてオルダーへ向かったわけである。自発的か召喚されてか、いずれにせよ、アレ

クサンドルには前年のことで、ウラグチ・カン（年代記では「ウラヴチ」）の前に申し開きをする必要があったのであろう。⁽⁴¹⁾カンへの贈り物を使者にもたせ、騒擾の首謀者を厳罰に処したとはいえ、タタール税の徴収そのものは実現できなかったからである。年代記はオルダーにおいてアレクサンドルに何が起ったか、何も伝えない。ただ「祖国へ帰国を許された」と無愛想に記すのみである。ここには通常みられる「名譽とともに」という語が欠けている。⁽⁴²⁾おそらくアレクサンドルは厳しい追及を受け、カンとその側近を何とかなだめ、従順な臣下となることを誓約して、やっとのことで帰国を許された、というような状況であつたものと推測される。

その誓約が試される時がさっそくやってきた。『ノヴゴロド第一年代記』の翌年（一二五九年）の項に、次のように記されている。

「その冬、ミハイロ・ピネシチニチが下流地方から偽りの知らせをもってやってきて、次のように言った。『もし数〔число〕人口調査、そしてまたそれに基づく課税ないし税そのもの』に応じなければ、すでに下流地方に〔タタール〕部隊が〔襲来すべく待機して〕いる。』そこでノヴゴロド人は数に応じた。その同じ冬、呪われしタタール、生肉喰らいのベルカイとカサチクが、己が妻ら、その他多くの者たちとともにやってきた。ノヴゴロドに大きな騒擾がおこった。〔ノヴゴロド〕領内で多くの悪事がなされた。呪われしタタールへ〔渡す〕税〔usta〕を取ろうとしたのである。呪われし者の一人が死を恐れ始め、オレクサンドルにこう言った。『われらに警護人を与えよ。人々がわれらを殺さないように。』そこで公は、ポサードニク〔市長官〕の息

子とすべてのジェチ・ボヤールスキー「貴族の子、下級勤務人」らに、かれらを夜の間守るよう命じた。タタールはこう言った。『われらに数を与えよ。さもないければ、「懲罰部隊を呼びに」立ち去るであらう。』だが、庶民(chen)は数を与えることを望まずに、こう言った。『聖ソフィヤ「寺院」のため、また天使の家々「教会」のために名誉ある死を遂げよう。』その後人々は二つに分かれた。善き者、それは聖ソフィヤと正しき信仰に従うのである。そして争論がおこった。大いなる者たちが小さき者たちに数の故に圧力を加えることを命じられていたのである。そして呪われし者「タタールか」は聖霊に追われて逃げようとした。かれら「ノヴゴロド人の一部」は町のむこう側に攻めかけようと、悪しき企みをいだし、また別の者たちは湖の方からこちら側を「攻めようとした。」だがキリストの軍勢が現れてかれらを阻み、かれらは「それを」できなかった。かれら「ノヴゴロドの大いなる者たちか」は恐れを抱き、一方の側、聖ソフィヤの方「町のヴォルホフ川をはさんで西側」に渡り、こう言った。『われらは聖ソフィヤの傍らに己が頭を置こう。』そして翌朝、公はゴロジシチュを出立した。かれと共に呪われしタタールもやってきた。かれら「ノヴゴロド人」は悪しき者たちの助言で課税に応じた。貴族たちは自らの負担を少なく、そして庶民の負担を重くしたのである。呪われし者たち「タタール」は街路を馬で乗り回り、キリスト教徒の家々を記録し始めた。とこのもわれらの罪のゆえに、神が荒野から獐猛な野獣を導き入れ、強き者たちの肉を食らい、貴族たちの血を飲むようにさせたからである。そして呪われし者たちは税を取ると、去っていった。オレクサン

ドル公も己が子のドミトリを「ノヴゴロド」公の座につけた後、跡を追って去った。⁽⁴³⁾

すなわち、一二五九年にも激しい反対運動がおこったことがわかる。とりわけ「庶民」が、反対のイニシアティブをとったことが記されており、ソヴェトの研究者はこれを階級闘争の現れとして強調したのであるが、その是非はさておき、なぜ「庶民」がとくに反対したのであろうか。これについてはこれまでも、階級闘争とする以外にも様々な説明が試みられている。たとえば、ノヴゴロド人の異民族、異教徒にたいする民族(愛国)主義的、宗教的反発を指摘する者⁽⁴⁴⁾、「数え、量り、計測する」ことにたいする、あるいは厳密な数字にたいする宗教的・神秘的な恐れ⁽⁴⁵⁾の念を説く者がいる。もちろん、民族的要素をこの時代に過度に強調することは慎まなければならないが、とくに宗教的感情については、それを完全に否定することはまた正しくないであろう。

しかし重要なのは、やはりノヴゴロド内部の状況であらう。ノヴゴロドでは、年代記が注目したように、「大いなる者」と「小さき者」、つまり貴族・上層民と「庶民」との間に明確に対立があった。おそらく前者も、「数」、すなわち人口調査とその結果としての課税の対象となった⁽⁴⁶⁾。しかしかれらは、これを拒むことによるタタールからの懲罰、懲罰によって失われるものにたいする恐れ⁽⁴⁷⁾の念をいだいた。それゆえかれらは強くは反対せず、ある段階で人口調査の受け入れを決めた。これにたいし、「庶民」はあくまでも課税に反対した。その真の理由は人口調査が貴族も庶民も関係なく、全世帯を数えるという形で行わ

れたことであろう。これは庶民には圧倒的に不利であった。市内に、あるいは市外の自領地に広大なあるいは多くの邸宅を構え、多くの使用人・従属民を抱えていた貴族・大商人ら上層市民と、通常の手工業者・商人が同じように数えられ、課税されることに、「庶民」は反発したものと考えられる。おそらくカン国側は、できるだけ多くの税を集めようとした。それゆえ、貴族や富裕層からはより多くの税を取ろうとしたであろう。^⑧しかし世帯を数え、市全体の税額を算出した後、モンゴル人はおそらく、その割振りおよび徴収の実務は、市当局、すなわち貴族層に委ねた、あるいは少なくとも助力を求めたものと考えられる。貴族層はここで「自らの負担を少なく、そして庶民のそれを重くした」のである。絶対額はわからない。おそらく、貴族の方が多額の税を支払ったであろうが、庶民はそれでも自分たちの負担が重いと考えたということであろう。それゆえ、庶民はモンゴル人による課税そのものではなく、その不利な配分法に憤った、とするM・N・チホミロフの指摘は、庶民の反モンゴル、反異教徒感情をやや過少評価しているきらいがないわけではないにしても、一片の真実を含んでいる。^⑨

このように、ノヴゴロド下層民は上層民に反抗し、両者の対立は結局は、支配者モンゴルの意図を挫折せしむる事態にいたらんとしたほどであったが、事は急速に収束する。市郊外のごろジシチュに待機していたアレクサンドル大公が、自身の従士団とタタール人部隊を伴って介入したのである。大公は今回人口調査を実現できなければ、大変なことになると覚悟し、前年のオルダーでの誓約を忠実に実行に移したのである。かれはこの度は十分な兵力を備えていたのである。抵抗

抗は武力で押さえられた。ノヴゴロド民は人口調査を受け入れ、おそらくは貴族層の思惑どおりに税を支払うことを余儀なくされた。タタールは去り、アレクサンドルも第二子ドミトリを公位につけた後に、去った。^⑩北西ルーシにあって誇り高き「自由」を謳歌したノヴゴロドも、課税を受け入れることによって、モンゴルの支配下に現実的・直接的に組み込まれたのである。

こうして一三世紀五〇年代末には北東ルーシのほぼ全域が、モンゴルの徴税体制のなかに組み込まれた、ということができる。その後のルーシが、このようにして定められた規則に従って、タタール税を定期的に支払ったのかどうかについては、意見が分かれている。たとえば、V・L・ヤーニン^⑪は『ノヴゴロド第一年代記』一二七〇年の項を引きあいに出して、ダーニ（貢税）はノヴゴロドから定期的に支払われていたと主張している。^⑫これにたいし、ホロシケケヴィチが批判を加える。かの女によれば、一二七〇年の記事ではノヴゴロド公は都市側からタタール税を単に徴収したのではなく、その支払いを「要請」しているのだ、支払いが当然のこととされていたわけではなかった。その都度「要請」されるべき不定期的性格を有していたとするのである。^⑬

タタール税の支払いが、あるときに定められた規定に従って、多少なりとも規則的、定期的にまた定額が支払われたとは、実際には考えにくい。モンゴル支配の初期にはある程度そうしたこともありえたとは考えられるが、その場合でも、その時々の方々の状況によって、微妙に揺れ動きながら徴収され、また納付されたと考えられる。その意味で

はヤーニンの見解はやや行き過ぎで、現実的ではないように思われる。

三 北東ルーシ、一二六二年

以上のように、一二五〇年代の末には、北東ルーシにおいてモンゴルの徴税システムがほぼ確立されたと考えることができるが、実際の徴収業務はどのように行われ、それになりたいしルーシの人々はどのように対応したのが、次に問われるべきことであろう。すでに示したように、ルーシの人々はこれを唯々諾々と受け入れたわけではなかった。このへんの事情については、一二六二年の年代記記事がもっともよき検討の素材を与えてくれる。

『ラヴレンチー年代記』の六七七〇年の項は、次のように伝える。

「神はロストフの地の民を、ベスルメン「ムスリム」の凶暴な抑圧から解放たれた。『神は』キリスト教徒の心に怒りの念を注ぎ込まれた。かれらは汚れた異教徒の暴虐に耐えかねて、民会を「召集しよう」と望み、町々から、ロストフから、ヴォロジメメルから、スーズダリから、ヤロスラヴリから、「異教徒を」追い払った。これらの呪われたベスルメンは、ダーニ「貢税」の徴収を請け負い、そのことで民に大いなる災いをもたらした。『貢税を払いきれないときには』多くのキリスト教徒が働いて利子を支払い、あちこちに「奴隸として」連れ去られた。だが人を愛する神はこれを見、そして聖母の祈りを聞き入れられ、己が民を大いなる不幸から解放たれた。同年、「人々は」背教者のイゾシマを殺害した。かれは自ら修道士であったが、サ

タンの僕であった。かれは美酒飲みで、厚顔無恥、愚にも付かないことを口にし、聖物冒読者であり、最後にはキリストを拒み、偽りの預言者マ「ホ」メトの誘惑に陥り、ベセルメンとなった。そのころ、タタールの皇帝「ツェーサリ」から、チーチャム「不明」が「派遣されて」やってきた。それはクトウルビーという名の、よこしまなベセルメンであった。かの「教会から」追われた呪われし者はこの者の助力をうけて、キリスト教徒にたいし多大の侮辱を与え、十字架と聖なる教会に冒瀆を加えた。そこで人々は己が敵であるベスルメンに襲いかかり、かれらを追いだし、他の者を殺害した。このときかの不信心な「イ」ゾシマもヤロスラヴリで殺害された。かれの遺体は犬が喰らい、からすがついばんだ。」

ここでは一二六二年に、北東ルーシ諸都市で反タタール蜂起がおきたことが記されているのだが、それについて検討する前に、まず貢税（ダーニ）の徴収方法について述べられていることに注目しておこう。すなわち、タタール税の徴収は「ベスルメン」、すなわちムスリム（イスラム教徒）に請負の形で委ねられていることがわかるのである。ここで言われているムスリムとは、おそらくはモンゴル支配下で早くから財政・交易面で活躍していたムスリム商人たちで、ペルシア人、アラブ人、トゥルクメン人、キプチャク人など様々な民族の者たちであったろう。⁽⁵⁵⁾かれらはおそらくは、若干のタタール人部隊と、なによりも現地のルーシ諸公とその従士などの護衛の下に、ときに強制力を用いて税の取り立てを行ったのであろう。一二六二年には、その過酷な取り立てが原因で蜂起がおきたのである。

さて蜂起であるが、このときは一二五九年のノヴゴロドのときよりも規模も大きく、またその性格も深刻であった。少なくとも四都市で同時に蜂起が起⁵⁷⁾こり、ムスリム商人・貢税徴収請負人は追放され、なかには殺害された者もいたからである。四都市（あるいは北東ルーシ全域）で反タール蜂起が起きたとすると、それは単なる偶然の一致ではなく、諸都市間には何らかのつながりがあったのではないか、あるいは蜂起は誰かによって指導されていたのではないか、という想念が自ずから浮かんでくるであろう。蜂起の組織性の問題である。

事実、年代記のなかにはそれを思わせる記述も存在する。『ウスチュグ年代記』六七七〇年（一二六二年）の項は、暴動について簡潔に記しながら、さらに次のような独自の挿話を記している。

「またウスチュグの町に、そのころヤサーク「十分の一税ないしタール税一般のこと」徴収人のブガという勇者がいた。かれはあるキリスト教徒から、ヤサークの代わりに嫁入り前の娘を側女として力づくで奪った。そのときウスチュグに、タタールを討て、という大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチの回状が届いた。娘は「このことを」ブガに伝えた。そこでブガは民会の場合にやってきて、ウスチュグの人々にたいし、かれらの言うとおりにすると言⁵⁸⁾って懇願し、洗礼をうけ、娘と正式に結婚し、イヴァンという名をえた。」

ここでは、アレクサンドル大公自身が蜂起を呼びかけているかのような記述がなされている。はたしてこれは事実とみることができるであろうか。これに肯定的に答えたのはナソーノフである。そこでかれの見解をしばらく見てみよう。⁵⁹⁾

ナソーノフによれば、一二六二年蜂起の原因は、ムスリム・貢税請負人にたいする北東ルーシ都市民の怒りであったが、この請負人はキプチャク・カンのベルケ（一二五八―六六年在位）からではなく、大カーンのクビライから派遣されたものであった。ナソーノフはその根拠として、先に本稿の筆者が引用した『ラヴレンチー年代記』の記事を引き、そのなかの「クトゥルビー」を「タタールの皇帝」自身の名ととり、さらにそれをクビライ・カーンと解釈したのである。⁶¹⁾

ナソーノフは請負人をクビライから派遣されたとする第二の根拠として、さらに次の「事実」をあげている。すなわちかれによれば、ルーシの年代記作者は、一二六〇年代の中頃まではキプチャク・カンを「皇帝」（ツァーリないしツェーサリ）と呼んだことはなく、そう呼ぶ場合には常に、モンゴルの大カーンのことを念頭においていたというのである。ナソーノフのこの指摘は、確かに重要である。かれによれば、最古の年代記（ラヴレンチー、イパーチー両年代記）は、バトゥ（一二五六年没）、サルタク（一二五六―五七年在位）、ウラグチ（一二五七年）の最初の三人のキプチャク・カンを一度として「皇帝」と呼ぶことはなかった。五人目のモンケ・テムル期（一二六六―八〇年）になって、キプチャク・カン国が最終的に帝国から分離して初めて、キプチャク・カンが「皇帝」と呼ばれ始めたという。『シメオーノフ年代記』では、初めて「皇帝」と呼ばれたのは第四代のベルケ・カンで、かれが没するときのこと（一二六五年）であった。つまりこれらの年代記では、ベルケ・カンが最初に、しかもその治世の末年になって、「皇帝」と呼ばれるようになったということになる。⁶²⁾

キプチャク・カンがルーシでいつから、「皇帝」と呼ばれるようになったかは、キプチャク・カン国がいつ帝国から自立したか、という問題と関わっている可能性もあるので、重要である。とくにそれは、ナソーノフにとっては、一二六二年にルーシにやってきた貢税請負人が、大カーンからのものであったことを裏付けることにもなるので、一層重要であった。現在、本稿の筆者は、ナソーノフの上の指摘を論駁することのできる十分な材料をもつものではない。研究者のなかでは、G・A・フォードロフ・ダヴィドフ、V・A・クーチキンらがナソーノフ説を採用、あるいはそれを補強する形で論を展開している⁽⁸⁵⁾。しかしナソーノフがあげる論拠の一部は、必ずしも説得力あるものではない。たとえばかれは、一二五二年にアンドレイ・ヤロスラヴィチ大公が「皇帝」に仕えることを拒否して国外へ逃亡した（この後その兄弟アレクサンドルが大公となった）ことを伝える年代記の有名な箇所をあげて、この「皇帝」はモンゴルの大カーンだと主張したが、これはサライのカンとった方がむしろ自然である⁽⁸⁶⁾。またヴェルナツキーは、『スーズダリ（ラヴレンチー）年代記』では、モンゴルの大カーンは「カン Kan」と呼ばれるのが普通で、「皇帝ツァーリ」とよばれることはない、と主張している⁽⁸⁷⁾。A・P・トロチコも同様で、すでに五〇年代初めから、年代記はキプチャク・カンを「皇帝」と呼ぶようになったとする。本稿も上に訳出したように、「クトゥルビー」を「皇帝」ではなく貢税請負人の名ととっている⁽⁸⁷⁾。

それではナソーノフにとって、請負人は何故大カーンからのものになければならなかったか。それは、かれによれば、これらの請負人に

対する反抗は大カーンに対する反抗ではあっても、キプチャク・カンに対するものではなかったからである。かれによれば、モンゴルではモンケ・カーンの没（一二五九年）後、クビライとアリクブガ兄弟の間に帝位をめぐる争いが起き、キプチャク・カン、ベルケは最初は前者を支持したものの、やがて（反クビライ派のカイドゥに味方するようになって）、反クビライの立場をとるようになった。（当時帝国では、ウゲデイ・カーンの孫カイドゥがクビライの大カーン即位に反対してアリクブガを支持。三〇年余りの間クビライに敵対した。カイドゥはチャガタイ・カン国を併合しようとして第五代チャガタイ・カンのアルグとも争った。後者は最初アリクブガを支持していたが、一二六二年これを裏切り、クビライ側についた。カイドゥはキプチャク・カンのベルケらの後押しをうけて、一二六三年アルグを攻めたが、撃退された。翌一二六四年、アリクブガはクビライに屈した。）⁽⁸⁸⁾ 帝国内の内紛はキプチャク・カン国の自立化を促進し、帝国の徴税請負人らの横暴に不満を募らせていたルーシ諸都市と、それをどう扱うかで頭を悩ませていたルーシ諸公に、絶好の機会を与えることになった。このようにして、諸公、とりわけアレクサンドル大公自身が関与する蜂起が起こったのである。たとえ反抗しても、遠方の大カーンは懲罰軍を送ることもできず、またカーンに敵対するキプチャク・カンも、ルーシの反抗を黙認するであろう、と見込んでのことであった。

以上がナソーノフの見解であるが、はたして一二六二年の蜂起は、アレクサンドル・ネフスキーら諸公の指導によっておきたと考えることはできるのであろうか。

まず最初に指摘されなければならないのは、ネフスキーや諸公の関与を伝える史料は、後代のものであるということである。『ニコン年代記』、『ウスチュグ年代記』、また『スチューペンナヤ・クニールガ』は、いずれも一六世紀に成立したものである。これにたいし、『ラヴレンチー年代記』（一四世紀）など、より古い史料はネフスキーと諸公の関与については、まったくふれることがない。それゆえ、すでにタタールのルーシ支配が過去のものとなりつつあった時代の、後代の年代記は、西方の敵からの国土防衛者としてすでに英雄の地位を獲得していたネフスキーや、ルーシ諸公の名譽をさらに高めるために、かれらを反タタール蜂起の指導者として描きだそうとしたと考えられよう。その点、別な意味でネフスキーの贊美をはかった『アレクサンドル・ネフスキー伝』（二三世紀後半の作）がかれの蜂起への関与はおろか、蜂起そのものについても触れていないのは象徴的である。⁽⁷⁶⁾

次に、貢税請負人をモンゴル「皇帝」からのものとするナソーフ説は、考えられないことではないけれども、やはり無理があるように思われる。ヴェルナツキーは、一二六二年当時には、中国からルーシへの道は依然としてアリクブガによって阻まれており、クビライの派遣人がルーシに到達できたかどうかは疑わしい、と指摘している。そしてこのときの徴税は、（クビライではなく）アリクブガとキプチャク・カンのベルケとの共同作業であった可能性を示唆している。いずれにせよ、貢税請負人を派遣したのが誰にせよ、ベルケが徴収された税の相当部分への権利を持っていたことは、否定できないとする。⁽⁷⁷⁾ つまり、ルーシ諸公が徴税に反抗したならば、

それはとりもなおさずキプチャク・カンへの反抗をも意味し、懲罰は避けられなかっただろう、というのである。本稿の筆者もこの結論には賛成したい。⁽⁷⁸⁾

さらにこれとの関連で、蜂起後のネフスキーのサライ行き（その年、大公アレクサンドルはオルダの皇帝のもとへ行こうとした。人々が不幸を免れるよう嘆願するためである。⁽⁷⁹⁾）に関する、ナソーフの説明についても批判的にならざるをえない。かれによれば、これまでの歴史家は、ネフスキーのこのオルダ行きを、前年の蜂起に対し予想されるオルダからの懲罰を回避するためのもの、と解してきたが、これは誤りで、かれは別の案件で、（つまり当時キプチャク・カン国が、イル・カン国との戦争のため被支配地域からの徴兵を強めていたことにたいし、ルーシが過大な徴兵を免れるよう画策するために）行ったにすぎない、と主張したのである。⁽⁸⁰⁾ ナソーフはキプチャク・カン国からの懲罰はありえなかったと考えているので、ネフスキーのオルダ参りは蜂起とは関係のない案件で行われたに違いない、とするのである。

だがこの解釈もやはり不自然である。ネフスキーは北東ルーシの住民を抑えておくことができなかったことをわびるために、カンのもとに急いだとするのが自然であろう。カンの方は、本来ならばルーシをその反抗ゆえに厳しく罰すべきであったが、イル・カン国との戦争のためにその余裕がなく、そこでルーシには懲罰の代わりに厳しい徴兵を課した。ネフスキーは反抗をわび、事情を説明して、懲罰とともに、厳しい徴兵という「不幸」をも何とか回避しようとした、と考えられ

るのである。それゆえ、ナソーノフがカンによるルーシからの徴兵に注意を向けている点は正しいといえるが、そのみをアレクサンドルの今回のオーダー行きの理由とするのは、不自然と言わざるをえない。⁽⁷⁶⁾『ソフィヤ第一年代記』の次の記述は、この間の事情をもっとよく描いているように思われる。

「[タタール]軍がキリスト教徒「ルーシ人」を虜[兵士]にとるべく送られた。このとき異教徒から大きな苦悩がおこった。かれらは人々を圧迫し、人々にかれらとともに戦にでかけるよう命じた。大公アレクサンドルはオーダーの皇帝のもとへ行こうとした。人々が不幸を免れるよう懇願するためである。」⁽⁷⁷⁾

ここではルーシが蒙るかもしれない「不幸」が、まさにカン国による徴兵であることが、明らかにされているのである。上の『ヴォスクレセンスカヤ年代記』では、その点不明確であった。これにたいし、『ネフスキー伝』もこの「不幸」を徴兵ととらえていることは重要である。⁽⁷⁸⁾

ネフスキーの願いが聞き入れられたかどうか、史料は何も伝えていない。しかし、年代記にはルーシから兵員が徴発されたという記述もない。いずれにせよ、ネフスキーが蜂起後ただちにサライにでかけたのは、自身は蜂起にまったく関係がなかったからであろう。それに、かれのキプチャク・カンにたいする忠勤ぶりは、すでに十分に立証済みのことであった。そうであるからこそ、カンもかれを受け入れ、その弁明に少なくとも耳を貸すことはしたのであろう。ただかれは、すぐに故国に戻ることはできなかった。カンはかれを引き止め、かれはその冬をオルダーで過ごさざるをえなくされ、そこで発病する。⁽⁷⁹⁾カン

はかれにたいする疑念を払拭することができなかったのかもしれない。やっとのことで放免されたネフスキーは、ヴォルガ川沿いに帰国の途につくが、その途中、ゴロジェツで没する。一二六三年十一月一日のことであった。⁽⁸⁰⁾

以上、ナソーノフの見解に疑問を呈してきたが、ネフスキーの関与が疑わしいからといって、蜂起が全く自然発生的におきたと考えるのもまた、正しくないであろう。何らかの指導や組織性を仮定しなければ、多くの都市でのほぼ同時の発生は説明できないであろう。ただそれがどのようなものであったかについて、知る手がかりはほとんどない。本稿の筆者としては、ネフスキーの指導と関与については否定的ではあるが（かれのそれまでのキプチャク・カンにたいする従順な態度、その現実的政治感覚などから判断してのことである）、カンと直接的に関係をもつことの少なかつた地方諸公、あるいは貴族等上層民のなかには、あるいは反タタールの行動に出る者もいたかもしれないと考えている。⁽⁸¹⁾

最後に、蜂起の原因の問題についても触れておかなければなるまい。先に、蜂起は貢税請負人の過酷な取り立てに、都市民が憤慨しておこしたものと記したが、さらに宗教的要因についても、指摘しておく必要がある。これは、すでに引用した諸年代記の記事からも明らかである。ムスリムとなったイゾシマの末路、最後には正教に改宗し、力づくで奪った娘と正式に結婚して難を逃れたbugaの例をもちだすまでもなく、年代記作者は正教と異教、ないしイスラームとの対立性を強調している。これが実際の蜂起に際しての状況を正確に反映したもののか、

それとも、より後代の年代記作者（ほとんどが修道士であった）の立場を表したもののかは、簡単には言えない。各年代記、また当該個所の執筆、また写筆の時期が慎重に検討されなければならない。たとえば、『ラヴレンチー年代記』は一四世紀の写本で伝わるが、蜂起の記事がいつ執筆されたのか、それがどのようにして『年代記』上に現在見られるような形をとるにいたったのか、は不明である。本稿の筆者には、蜂起の記事中の護教的ニュアンスは一四世紀以降のものに思われるが、蜂起時にも、あまり強調することは控えるべきであるとしても、ある程度はそのような要素もあったと考えている^⑧。

おわりに

以上、モンゴルのルーシ支配の成立過程について記した。それはカ
ン国成立後ただちに、しかも順調に樹立されたわけではなく、おそら
くカン国それ自体の統治機構がある程度整えられ、機能し始めた後に、
着手され、激しい抵抗のなかで、徐々に樹立されたことが明らかとなっ
た。その際、アレクサンドル・ネフスキー大公の役割が大きかったこ
とも確認される。モンゴルの北東ルーシ支配は、以上のような経過で
始められたのである。もし抵抗という観点からみるのであれば、南ルー
シにおけるダニール・ガリツキー公、ミハイール・チェルニゴフス
キー公の例も重要であるが、それについては特別に論じられるべきで
あろう。

注

最初に本稿で利用する年代記をまとめてあげておく。ロシア年代記全集
Polnoe Sobranie Russkikh Letopisei の各巻はその巻数、出版地、出版年代
を中心に記す（以下注では *PSRL* と略記）、巻数とページ数のみを記す）。

- t. I, M. 1962 (Vospriozvedenie teksta izdaniia 1926-1928 godov. [Lavrentevskaia Letopis', vyp. 1 : Povest' vremennykh let. (Vospriozvedenie izd. 2-go. L., 1926); vyp. 2 : Suzdalskaia letopis' po Lavrentevskomu spisku. (Vospriozvedenie izd. 2-go. L., 1927); vyp. 3 : Prilozheniia : Prodlizhenie Suzdalskoi letopisi po Akademicheskomu spisku. L., 1928] ラヴレンチー年代記。なおこの版は一九九七年、モスクワにおいて、テキスト部分はそのままの形で復刻されてゐる)
- t. IV, M., 2000 (Chast' I. Novgorodskaia chetvertaia letopis'. Vospriozvedenie izd. 1915, 1925, 1929 godov. ノヴゴロド第四年代記)
- t. V, Spb. 1851 (Reprint : Bruecken-Verlag, Duesseldorf, 1973) (プスコフ年代記、ソフヤ第一年代記)
- t. VI, vyp. I, M., 2000. (ソフヤ第一年代記)
- t. VII, Spb. 1856 (Reprint : Bruecken-Verlag, Duesseldorf, 1973) (ヴォスコレンスカヤ年代記。二〇〇一年、モスクワにおいて復刻。)
- t. X, M. 1965 (Vospriozvedenie teksta izdaniia 1885 g. Niconn年代記。二〇〇〇年、モスクワにおいて復刻。)
- t. XV, M. 1965 (Vospriozvedenie teksta izdaniia 1922 i 1863 gg. Romanovskii年代記、トヴェリ年代記。二〇〇〇年、モスクワにおいて復刻。)
- t. XVIII, Spb. 1913 (Reprint : Bruecken-Verlag, Duesseldorf, 1971) (シメオノフ年代記)
- t. XX, chast' I, Spb. 1910 (Reprint : Bruecken-Verlag, Duesseldorf, 1971) (リヴォフスカヤ年代記)
- t. XXI, Spb., 1908 (Reprint : Bruecken-Verlag, Duesseldorf, 1970) (スチーベンナヤ・クニイガ)

- t. XXV. M.-L., 1949 (一五世紀末のモスクワ年代記集成)
 t. XXVI. M.-L., 1959 (ヴォロゴツコーベルミスカヤ年代記)
 t. XXXVII. L., 1982 (ウスチュグ年代記)
 t. XXXIX. M., 1994 (I・N・ツァールスキー写本による『ソフィヤ第一年代記』)
Novgorodskaia Pervaia Letopis' starshego i mladshego izvodov. M.-L., 1950 (ノヴゴロド第一年代記) (以下NPLと略記。二〇〇〇年「モスクワにおいてPSRL t. IIIとして復刻されたのは、この版である。')
 (1) 本稿と類似のタイトルの邦語文献がすでに存在する。加藤一郎「モンゴル人によるルーシ支配の開始ーキプチャク汗国の成立」、『思潮』1981-11。加藤論文はこのテーマについて概説的に扱っているが、本稿はこれとは異なる観点からもう一度立ち入って考えてみようとするものである。
 (2) 南西ルーシの状況は不明であるが、カラコルムへ向かう途中ここを通った(一二四六年)教皇使節のプラノ・カルピニの伝えるところによると、キエフの南方一二〇キロほどにある町はタールの直接支配下にあったという。またかれは、ドニエプル川を渡って間もなくの地点には六千人規模のタール軍が駐屯していたという。カルピニ／ブルク(護雅夫訳)『中央アジア・蒙古旅行記』光風社出版、平成元年、六六・六九頁(本書は桃源社、一九六五年の再版である)。さらにヴェルナツキーが、南西ルーシ(ベレヤスラヴリ、キエフ、チェルニゴフ、ポドリエ各地方)とステップ地帯は直接統治されたと考えている。
 Vernadsky G., *The Mongols and Russia*, New Haven and London: Yale University Press, 1953, p. 141-142, 214.
 (3) プラノ・カルピニの記述。カルピニ／ブルク『中央アジア・蒙古旅行記』四五〜五〇頁。
 (4) PSRL. I: 470. ヤロスラフ大公はその後自身がカラコルムに行くことを余儀なくされ、その帰路ないしその地で没している(一二四六年)。

- PSRL. I: 471. プラノ・カルピニはかれがグユク・カーンの母の手で毒殺されたと伝える。カルピニ／ブルク『中央アジア・蒙古旅行記』八一頁。この毒殺説についての史家の見解は分かれているが、それについてはこちら、Fennell J., *The Crisis of Medieval Russia. 1200-1304*, London and New York, 1983, p. 101を参照。
 (5) 『ノヴゴロド第四年代記』六七五〇年(一二四二年)『PSRL. IV: 228. フェネルによれば、一二四二年ー一二五二年の期間にスーズダリ諸公だけでも一九人以上がサライに、うち四人がさらにそこからカラコルムへ向かっているという。Fennell, *The Crisis of Medieval Russia*, p. 99.
 (6) 『ソフィヤ第一年代記』PSRL. VI: 319; NPL. 298. シハイール・チェルニゴーフスキー公の殉教記事の中で。
 (7) カルピニ／ブルク『中央アジア・蒙古旅行記』四九頁。護訳の原本はドーソン版であるが、そこでは「サラセン人」となっている(*The Mongol Mission*, translated by a nun of Stanbrook Abbey; edited and with an introduction by Ch. Dawson. London, New York, 1955, p. 39) グレコフは、カルピニの伝える記事と一二四五年の『ソフィヤ第一年代記』の記事は同じ事象をさしていると考えているが、これには反論もある。ヤクボフスキー、グレコフ(播磨訳)『金帳汗国史』生活社、昭和一七年(一九七〇年(註三三))。Grekov B. D. i Iakubovskii A. Iu., *Zolotaia orda i ee padenie*, M.-L., 1950 (Reprint: M., 1998), s. 329, prim. 1. (なお上の邦訳はGrekov B. D. i Iakubovskii A. Iu., *Zolotaia Orda*, M., 1937からのものであるが、本稿では原書としては、その改訂版である一九五〇年版のリプリントを利用する。) 反論は、Allen Th. T., "Mongol Census Taking in Rus', 1245-1275", *Harvard Ukrainian Studies*, 5-1 (1981), p. 36-38; id., *Mongol Imperialism*, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1987, p. 135. アルセンは一二四五年の調査をベトナムが独自に行ったもの、他方一二四七年の調査は新カーン・グユクの命によるものと、両者を区別する。

- (8) 「遣必蘭別兒哥括幹羅思戸口。」『元史 一紀(第一冊)』中華書局版、四六頁。
- (9) *NPL*. 82, 310. 『元史』のベルケと『ノヴゴロド第二年代記』一二五九年のベルカイを同一人物としたのは E. Bretschneider, *Medieval Researches. From Eastern Asiatic Sources*, v. 2, London, 1910, p. 79-80 である。アルセン前掲論文 p.44-45 及び前掲書 p.141 の説を採用している。
- (10) *PSRL*. VI: 333. これは以下にあげる後代の諸年代記に受け継がれる。*PSRL*. VII: 161 (ヴォスクレセンスカヤ年代記); *PSRL*. XX: 163 (リヴォフスカヤ年代記); *PSRL*. XXV: 142 (一五世紀末のモスクワ年代記集成); *PSRL*. XXVI: 88 (ヴォロネジ・ベルシスカヤ年代記)。
- (11) *PSRL*. I: 474-5 (なお本稿の史料からの引用や訳文中の「」は本稿の筆者による説明ないし補記である。) 後述のように『ノヴゴロド第一年代記』は同年冬タールの使者が(アレクサンドル・ネフスキー公とともに)ノヴゴロドにも現れ、十分の一税などを要求したとする。*NPL*. 82, 309. 『ソフィヤ第一年代記』(*PSRL*, VI: 334)、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』(*PSRL*. VII: 161) なども同様である。『トヴェーリ年代記』では一二五六年に「ルーシ全土」で調査が行われたとする(*PSRL*. XV: 401)。
- (12) *NPL*. 82, 310; *PSRL*. I: 475. やらば *PSRL*. X: 141-42 (ニコン年代記); *PSRL*. XVIII: 71 (シメオン・ノフ年代記) をも参照。『ラヴレンチヤ年代記』のこの年(一二五八年)の項には「ウラジーミルへやってきた調査人が、さらにノヴゴロドへ向かい、そこで調査した後、再びウラジーミルへ戻った」と記されているが、この点をどうみるかについては、後述注(41)を参照。
- (13) *PSRL*. I: 475; *NPL*. 82-83, 310-311. Vernadsky, *The Mongols*, p.215 は一二六〇年西ルーシ(ガリチ・ヴォルィニ)でも調査が行われたとするが、典拠をあげていない。
- (14) Allsen, *Mongol Imperialism*, p.139.
- (15) Nasonov A. N., *Mongoly i Rus'. Istoriia tatarskoi politiki na Rusi*. M.-L., 1940 (Reprint: The Hague, Paris, 1969), s.13-14; Allsen, *Mongol Imperialism*, p.118 f.
- (16) Grigor'ev A. P., "Iarlyk Mengu-Timura: Rekonstruktsiia soderzhanii", *Istoriografija i istochnikovedenie Istori Stran Azii*, vyp. XII, 1990, s. 67.
- (17) Barold V. V., *Sochineniia*, t. 5, M., 1968, s.498-499 は「モンケの登場後に帝国がカーンとバトゥの間であたかも二分されたとし、カン国の帝国からの独立化は五〇年代初頭になってからのことと考えているようにみえる。カン国の独立化の時期をさらに遅く設定する研究者も多いが、ここで両者の関係について、本稿の筆者の見解を記しておく。この関係を、キプチャク・カン国がある時点で独立し、その後は一貫してその地位を保ったという風に考えることは、おそらく正しくない。その時々支配者間の関係を具体的に捉える中で両者の関係を考える必要がある。バトゥ・カンとモンゴル皇帝との関係は一定したものではなかった。ウゲデイ・カーン亡き後バトゥは自身のもとを訪れたルーシ諸公の何人かをカラコルムへ向かわせたように、大カーンの權威を認めていた。しかしバトゥはルーシ諸公の多くを自らが謁見しかねる地位を安堵してやったように、ある意味では大カーンの大権を部分的に損なう様なこともしている。その一つの理由はかれがモンゴル支配者一族全体の最年長者であったということにある。すでに最初から自立的な側面をもっていたともいえる。その後モンゴルで故大カーンの妃トゥラゲネが実権をにぎり、その子グユクが大カーンになると、サライとカラコルムの間にはつきりと敵対的になる。ところがグユクの没(一二四八年)後バトゥの推すモンケが大カーンになると(一二五一―五二年)、カン国と帝国の関係も好転し、両者は密接な連絡を取り合うようになった。バトゥは一二五五年に没するが、その後をついだサルタク、ウラグチ両カンもモンケを大カーンとして敬ったようにみえる。少なくともウラグチは一二五八年初頭に行われた全帝国規模でのバグダード攻撃の際に、大カーンから要請されてキプチャ

ク・カン国軍を派遣している。しかしウラグチをついだベルケ・カンの代になると、状況は変わる。かれとイル・カンのフラグとの間の関係が悪化し、それはモンゴルでモンケが没し、クビライがカンとしてあとを継いだこともあって決定的になる。ベルケはモンケの後継者にアリクブガを対抗馬として推していたのである。おそらくこの時点でキプチャク・カンが決定的に独立の存在として振る舞っていくことになると考えられる。事実このころのキプチャク・カン国の貨幣からはカカンの名は消えていたことが指摘されている。バトゥ以降ベルケにいたるキプチャク・カン国の政治史については、さしあたり以下を参照のこと。Spuler B., *Die Goldene Horde. Die Mongolen in Russland 1223-1502*. Wiesbaden, 1965 (2. Auflage) S. 10-52; Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 140-163. またその後のキプチャク・カンと大カンの関係も複雑で、なかには一四世紀半ばまである種の関係がなかったわけではないことが指摘されているが、いずれにせよクビライの死（一二九四年）の後には、カンにとって大カンのとの関係が何か実質上の意味を持つことはほとんどなくなっていたといえる。これについては、Spuler, op. cit. S. 250-254. を参照。

- (18) アルセンは注(7)にあげた文献で、ルーシにおける「人口調査」を、モンケ・カンの治世の本格的な全国内的調査の一環と位置づけて詳しく考察しつつ、独自の見解を表明している (Alisen 論文, p. 38 f. 著書, p. 136 f.)。

- (19) Nasonov, *Mongols in Rus'*, s. 12-14 は中国以外では人頭税、ただしルーシでは世帯税とす。(Spuler, *Die Goldene Horde*, S. 332 はナンノフのこの見解は確証がなかつと注記している。) Vladimirov-Budanov M. F., *Obzor istorii russkogo prava*, SPb., Kiev, 1909, Izd. 6-oe. (Reprint, The Hague, 1966) s. 200 は人頭税とする。佐口透『モンゴル帝国と西洋』平凡社、一九七〇年、一二頁は、イラン・中央アジア・中国占領地で人頭税とする。ルーシについての記述はない。しかし少なくともルーシでは一人ひとりが数えられたということは考えにくい。『ノヴゴ

ロド第一年代記』には、すでに引用したように、「呪われし者たちは……キリスト教徒の家々を記録し始めた」(傍点は引用者)とある (NPL, 83, 311)。「家々」を記録するときに、当然その家族構成員も記録されたと考えることは可能であるが、後述するように、モンゴルによる人口調査の実施、タタール税の導入がはかられたこの時期が、各地の住民の抵抗できわめて騒然とした情勢になっていたことを考慮にいれば、個々の世帯の構成員の厳密な確定、記録など、ほとんど不可能であったであろう。またロシアでは、一八世紀初頭まで、基本的には世帯に課税されていたことも考慮に入れなければならない。一五五〇年のスヂェーブニク、第八八条では、退去農民が支払う「住居料」ですら「門から」と、個々の家族構成員数にかかわらず、世帯単位で徴収されることになっていたことも、これとの関係で参考にならう (Zakonodatel'svo perioda obrazovaniia i ukrepleniia Russkogo tsentralizovannogo gosudarstva. Rossiiskoe zakonodatel'svo X-XX vekov. v deviat' tomakh. Pod obshechei redaktsiei O. I. Chistiakova. T. 2. M., 1985, s. 118, 167).

- Diakonov M. A., *Ocherki obshchestvennogo i gosudarstvennogo stroia drevnei Rusi*, SPb., 1908, s. 193; Fedorov-Davydov G. A., *Obshchestvennyi stroi Zolotoi Ordy*, M., 1973, s. 34; Grigor'ev, "Iarlyk Mengu-Timura", s. 80; Egorov V. L., "Aleksandr Nevskii i chingizidy", *Orechestvennaia Istorii*, 1997-2, s. 54; Khoroshkevich A. L., Pliguzov A. I. (J. Fennell の上掲書の露訳) *Dzhon Fennel, Krizis srednevekovoi Rusi. 1200-1304*. M., 1989 の序文 s. 23; Krivoshev Iu. V., *Rus' i Mongoly. Issledovanie po istorii severo-vostochnoi Rusi XII-XIV vv.* SPb., 1999, s. 184-188 などすべて世帯単位と考えている。

- (20) たとえば、キプチャク・カンからルーシ府主教へあてられたヤルリック (特許状) は正教会を課税の対象からはずし、それに保護を与えている。とりわけ一二六七年八月一日付のメング・チムール・カンからのヤルリックを参照された。Pamiatniki Russkogo Prava (以下 PRP), Pod red Cherepina, L. V., vyp. 3, M., 1955, s. 463. モンゴル支配における

- るロシア教会の状況に関する最近の研究としては、むしろあたり次を、
- Okhota N. A., "Russkaia tserkov' i Mongolskoe zavoevanie (XIII v.)", *Tserkov', obshchestvo, gosudarstvo v feodalnoi Rossii*, M. 1990, s. 67-84; Piguzov A. I. i Khoroshevich A. L., "Russkaia tserkov' i antiodynastika borba v XIII-XV vv.", v: *Tserkov', obshchestvo i gosudarstvo v feodalnoi Rossii*, s. 84-103. また年代記等に表れたルーシ教会のキエフ・ルーシ支配に対する態度の問題については、むしろたのOstrowski D., *Muscovy and the Mongols. Cross-cultural influences on the steppe frontier, 1304-1589*, Cambridge University Press, Cambridge, 1998の第二部「そのわけ」pp.144-198を参照のこと。
- (21) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s.15 sl.
- (22) 拙稿「キプチャク・カン国のルーシ支配の構造」、『前近代ロシアにおける都市と地方の社会的結合の諸形態に関する研究』(平成一三年度科研費報告書・研究代表者、豊川浩一、平成一四年三月)一〇二頁。
- (23) Tikhomirov M. N., *Krest'ianskie i gorodskie vosstaniia na Rusi XI-XIII v. M.*, 1955, s. 269-270.
- (24) Kargalov V. V., *Vneshne-politicheskie faktory razvitiia feodalnoi Rusi. Feodalnaia Rus' i Kocheviki*, M., 1967, s. 155-157.
- (25) Poluboiarova M. D., *Russkie liudi v Zolotoi Orde*, M., 1978, s.42-43.
- (26) Halperin Ch. J., *Russia and the Golden Horde. The Mongol Impact on Medieval Russian History*, Indiana University Press, Bloomington, 1985, p.35. ただかれは、それでは逆に具体的に誰がナソノフ説を踏襲しているのかについては記していない。バスカクがルーシの大都市周辺にタタールを住人とする防備集落をもうけ、そこを拠点に徴税やルーシの内政への干渉を行ったことを主張して、タタールの「占領体制」の存在に言及しているM・A・リモノフがその例とみなしうるかもしれない。さらにM・V・クリヴォシェーエフによれば、ホロシユケーヴィチも十人長、百人長らを軍事組織の長と考えているところ。
- Limonov Iu. A., "Raboty A. A. Zimina o Severo-Vostochnoi Rusi XIII-XIV vv. i izuchenie problemy basakhestva", *Spornye Voprosy otechestvennoi istorii XI-XVII vekov: Tezisy dokladov i soobshchenii Pervykh chlenov posviashchennykh pamiatii A. A. Zimina*, chast'. 1, M. 1990, s.156; Krivosheev, *Rus' i Mongoly*, s.164-165.
- (27) Grigor'ev, "Iarlyk Mengu-Timura", s.80.
- (28) Egorov, "Aleksandr Nevskii", s.53-54.
- (29) Vernadsky, *Mongols and Russia*, p.215-216.
- (30) 比較的最近ではI・B・フロヤノフがその民主的・人民的性格を主張している。これについてはむしろあたり、拙稿「ロシア中世都市をめぐる若干の問題点」キエフ・ルーシにおける都市の発生とその史的展開について、『史学雑誌』八八編第一号、一九七九年、六八―七一頁を参照されたい。このルーシにおける十進制的組織の出現と古ルーシ(古スラヴ族)の外部世界、たとえばステップ諸族との古くからの接触・交流との関連性については、特別の考察が必要である。ノヴゴロドにおける十進制的組織について、またそれがモンゴル以前から存在していたことについては、むしろたのBurov V. A., *Ocherki istorii i arkhologii srednevekovogo Novgoroda*, M., 1994, s. 101-137を参照。またV・I・ヤーニンがノヴゴロドにおける百人区の起源について興味深い説明を行っている(ヤーニン(松木・三浦記)『白樺の手紙を送る』山川出版社、二〇〇一年、一五四―一五五頁)。
- (31) Danilova L. V., *Selskaia obshchina v srednevekovoi Rusi*, M., 1994, s.245-250; Ee zhe, "O vnutrennei strukture selskoi obshchiny Severo-Vostochnoi Rusi", v kn.: *Rossia na putikakh tsentralizatsii*, M., 1982, s.6-17.
- (32) これについては、むしろたのNasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 98-99; Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 216-219; Fedorov-Davydov, *Obshchestvennyi stroi*, s. 122-124などを参照。
- (33) 例外はオストロウスキでもどうか。Ostrowski D., "The Mongol Origins of Muscovite Political Institutions", *Slavic Review*, v. 49, n. 4, 1990, p.530-533. キエフ期の十人長・キエフのそむが異なること

- ルマンによって指摘されている。Kolmann N. Sh., "Tysiatski", in: *Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*, ed. Wiczynski J. L. 40: 130-131. キスクワの千人長についてはむしろ「Knackstedt W. Moskau. Studien zur Geschichte einer mittelalterlichen Stadt. Wiesbaden, 1975, S.95-100を参照。
- (34) これらの商人団体については、さしあたり拙稿「ゴスチ考」、『スラヴ研究』三三号、一九八五年、一一二五頁を参照されたい。
- (35) これについては、Fennell, *The Crisis of Medieval Russia*, p.118を参照。
- (36) Egorov, "Aleksandr Nevskii", s.54-55.
- (37) Krivosheev, *Rus' i Mongoly*, s.169.
- (38) *NPL*, 82, 309. 『ノヴゴロド第一年代記(古輯・シノド本)』の邦訳が日本古代ロシア研究会により行われ、『古代ロシア研究』XII-XIX(一九七八—一九九四年)に掲載されている。本稿ではそれを参考にしながら、部分的に異なる訳を示したところもある。一二五七年の項の訳は、XVIII巻三一頁である(以下『古代ロシア研究』XVIII: 31のことく略記する)。
- (39) *ibid.* 82, 309. このときヴァシーリーは一七才であったので、とくにその側近の責任が厳しく追及されたと考えられる。
- (40) *PSRL*, I: 475.
- (41) 実は、同年代記の同年(一二五八年)の項には、上の記事の少し後に次のような記述もあり、アレクサンドルらが本当にこの年にオルダーへむかったのかどうか、厳密にいえば疑問なしとしない。「同年の冬、調査人がヴォロジメメルにやってきた。そして調査人と諸公らが大ノヴゴロドへ行った。アレクサンドル、アンドレイ、ボリスである。かれらは数え、再びヴォロジメメルに行った。ただノヴゴロドの者たちはアレクサンドルは留まらせ、大いに敬った。アレクサンドルはかれらと約定を結び、名譽とともに己が領国へ向かった。」(*PSRL*, I: 475) つまり、ここで言われているように、タタールの人口調査人が一二

五八年にもウラジミールへやって来て、しかもそこからさらにノヴゴロドへ向かって、調査実施後に再び戻ってきたとするならば、本稿で以下に記すように、『ノヴゴロド第一年代記』の一二五九年にも同じような記事があるので、タタールの調査人は一二五七年から三年連続でノヴゴロドまでやって来たということになり、その現実性が疑われてくるのである。二つの年代記の記述の正確性、厳密性も問題になってくる。両年代記の記述を単純に合わせて理解することができとも思われない。すなわち、調査人が一二五七年(ノヴゴロド第一年代記)、五八年(ラヴレンチー)、五九年(ノヴゴロド第一)と続けてノヴゴロドに来たと考えることができるかどうか、またアレクサンドルらのオルダー行きはあったのかどうかであるが、判断は難しい。ただ、ここは次のように考えたい。まず調査人の到来であるが、ここはノヴゴロドに関しては、やはり『ノヴゴロド第一年代記』を優先させ、一二五七年と一二五九年の二度と考える(その場合『ラヴレンチー』は一二五九年のことを、理由はともかくとして、一年前の項に書きつけてしまったということになる)。アレクサンドルらのオルダー行きに関しては、事是大公のオルダーとの外交関係、つまり国事行為に関わるものなので、大公おひざ下の年代記(『ラヴレンチー』)の記述を重視して、一二五七年事件の後の一二五八年に実際に行われた、と考えたいということである。

(42) たとえば、一二四三年かれの父ヤロスラフ大公がバトゥのもとを訪れたとき、バトゥはかれを「名譽とともに、手厚く迎え……去らせた」とされていた(*PSRL*, I: 470)。一二五二年にはアレクサンドル自身がオルダーへ向かい、「大いなる名譽とともに帰国を許された」とある(*PSRL*, I: 473)。

(43) *NPL*, 82-83 (『古代ロシア研究』XVIII: 32), さらに *NPL*, 310-311 をみよ。また「妻」および「税」(*uska*) については、Krivosheev, *Rus' i Mongoly*, 175 sl. が詳しく検討し、興味深い解釈を提唱しているが、ここでは論じない。*uska* については、さらに Vernatsky, *The Mongols and*

Russia, p.220-221)をも参照。なお、この記事中の「呪われし者は聖靈に追われて逃げようとした………かれらは恐れを抱き、一方の側、聖ソフィヤの方に渡り………」の箇所は、解釈が難しい。たとえばブーロフなどは、この時のノヴゴロドにおける貴族と庶民の対立を強調する余り、この箇所を一貫してそのような立場から解釈しているが(Burov, *Ocherki istorii i arheologii*, s. 123)、『本稿の筆者は「呪われし者」はタタールととり、その後の文についてのみ、主語が変わり、ノヴゴロド内の対立を示すものとした。

(44) たとえば、Tikhonov, *Krestianskie i gorodskie vostaniia*, s.271-274.

(45) こうした見方には最近批判もたせられるようになった。たとえば、Petrov A. V., "O borbe "stareishikh" s "meshimi" i vystupleniakh "kramolnikov" v Novgorode vtoroi poloviny XIII v.", *Vestnik LGU. Ser. 2. Istorii, iazykoznanie, literaturovedenie*. Vyp. 1, 1991, s.24-25.

(46) たとえば、Burov, *Ocherki istorii i arheologii*, s.122.

(47) たとえば、Klepinin N. A., *Sviatoi i blagovernyi velikii kniaz' Aleksandr Nevskii*. Paris, (出版年不詳) s.167.

(48) これを否定する者もある。たとえばBurov, *Ocherki istorii i arheologii*, s. 122-123. タタール税を課された客体については諸史家の間に意見の一致はない。全住民が課されたとする者、聖職者・教会関係者はもとより、他にも(たとえば貴族)税を免れた層があると考ええる者などで見解が分かれている。また仮に全住民が対象となったとしても、それは個々人に課されたのか(つまりこの場合には人頭税)、それとも世帯単位で課税されたのかで分かれている。本稿の筆者は貴族も対象となっており、またすでに記したように、世帯単位で課税されたと考えている。この問題については、さしあたり Krivosheev, *Rus' i Mongoly*, s. 184-188を参照のこと。

(49) 先に引用した記事の冒頭部に、某シハイロ・ピネシニチが偽りの使命をもってやってきて、ノヴゴロド人を脅かしたという箇所があるが、そこでいわれる「ノヴゴロド人」とは上の「大いなる者たち」の

ことであろう。「偽りの使命をもって」については「きりしないが、ここで述べられているピネシニチは、アレクサンドルが一二五六年にノヴゴロドを後にし、ウラジーミルへ向かったときに同行させた「ノヴゴロドの使者」の一人であることがわかっている。(NPL, 81, 309)」。おそらくは、かれがアレクサンドルの意向をくんで、あたかもタタール部隊がすでにノヴゴロド攻撃の準備を整え下流地方で待機しているかのような、虚偽の知らせを持ち込み、ノヴゴロド人にタタール税の受け入れを迫ったもの、と推測される。

(50) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s.15-16. またBartold V. V., *Sochineniia*, t. 1, M., 1963, s.478 は「チンギス・カンがブハラ攻略後、「町の主な人々や長老たち」のリストの作成を命じ、かれらに金品の要求を特別に行ったことを伝えている。おそらくルーシでも同じようなことは、当然行われたであろう。

(51) Tikhonov, *Krestianskie i gorodskie vostaniia*, s.273.

(52) NPL, 82-83, 309-311.

(53) Iann V. L., «Chernyi bor» v Novgorode XIV-XV vv., v: *Kulikovskai bina v istorii i kul'ture nashei Rodiny*. M., 1983, s. 99. 『ノヴゴロド第一年代記』一二七〇年の項(NPL, 88-89, 319-320)には次のような事件が記されている。すなわち、ノヴゴロドとその公ヤロスラフとが衝突し、追放された公がオルダーに訴えて、市側がタタール税の支払いを拒否していると「偽りの」告発を行う。そこでカンはノヴゴロドへ懲罰隊を送るが、そのとき別の公ヴァシーリーがノヴゴロドのために介入し、かれ自らがオルダーに向いて、ヤロスラフが偽りの告発を行ったことを申し出る。カンは懲罰隊に帰還を命じる。ヤーニンはこの記事から、ノヴゴロドは五〇年代末からこれまで「定期的に」税を支払っていたからこそ、懲罰を免れたのだ、と解するのである。

(54) Khorooshevich A. L., "Mongoly i Novgorod v 50-e gg. XIII v.", v: *Istorii i kul'tura drevnerusskogo goroda*. M., 1989, s. 72.

(55) PSRL. I: 476. なお引用文中の「チーチャム」という語について、ナ

ソノフはこれを人名としたが、Krivoshchev, *Rus' i Mongoly*, s.194はクトゥルビーにかかる何らかの説明の語とする。『ソフィヤ第一年代記』(PSRL. V:「一八五一年版」:190)はこの語を理解できず、使者とこの語で置き代えている。(ただこの年代記の二〇〇〇年版(PSRL. VI:336)ではこの箇所がTitian' poslonとなっており「チーチャム」が入り、それが「使者」と解釈される形をとっている。)

- (65) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 50-52; Cherepin L. V., "Mongolo-tatary na Rusi (XIII v.)", *Tataro-mongoly v Azii i Evrope*, M., 1970, s.194-195; Egorov, "Aleksandr Nevskii", s. 55; Krivosheev, *Rus' i Mongoly*, s. 191-192.

- (57) 『一五世紀末モスクワ年代記集成』はベレヤスラヴリも付け加える(PSRL. XXV:144)。「ウスチュグ年代記」では「ルーシの全都市」でとめる(PSRL. XXXVII:70. アルハンゲロコロツキー・ノヴォジーシ)。「ニコン年代記」も同様である(PSRL. X:143)。ただこれらは後代の年代記である。これらを根拠にこのときの蜂起を簡単に全ルーシ的なものと結論づけるわけにはいかなう。

- (85) PSRL. XXXVII:70 (=Ustuzhskii *letopisnyi svod (Arkhangelogorodskii letopisets)*, Podgotovka pečatni i redaktsiia K. N. Setbinoi. M.-L., 1950, s. 47-48)

- (59) 『スチューペンナヤ・クニガ』もアレクサンドルと他のルーシ諸公が率先してムスリムを追放し、打ち殺したと記す(PSRL. XXI:291)。また『ニコン年代記』は、アレクサンドルの名はださないうが、ルーシ諸公がタタールを町々から追い出したとする(PSRL. X:143)。

- (60) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 50 sl.

- (61) 「クトゥルビー」を「皇帝」の名として読むことは、文脈上十分可能であるが、それをクビライとすることは疑問である。むしろこのクトゥルビーは『スーズダリ年代記』六八三年(一二三〇五年)の項にでてくるバスカク・クトルブグを想わせる(PSRL. I:528)。両者を同一人物とするにはやや年代が違い過ぎるが、しかしそのような名の者

が他にもありうることを示すことにはなるだろう。

- (63) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 30, prim. 2. ルーシにおいては「ツァーリ」という語は最初、聖書における王や支配者をさす場合以外には、通常コンスタンティノープルの皇帝をさして用いられた。それがモンゴル侵入後しばらくすると、今度はモンゴルの支配者をもこの語で呼ぶようになった。これには侵入当時コンスタンティノープルに正教キリスト教徒の皇帝が存在しなかったこと(一二〇四年の第四次十字軍によるコンスタンティノープル奪取)、ラテン帝国の成立とビザンツ皇帝のニカイアへの避難)も関係していたと考えられるが、ビザンツ皇帝によるコンスタンティノープル奪回後は、ビザンツとモンゴルの両支配者をともに「皇帝」と呼ぶようになった。これについてはさしあたG' Gorskii A. A., "O titule "tsar" v srednevekovoi Rusi (do serediny XVI v.)", *Odisei: Chelovek v istorii*, 1996. M., 1996, s. 205-212; この問題の興味深いことは、Cherniavsky M., "Khan or Basileus: an Aspect of Russian Medieval Political Theory", *Journal of the History of Ideas*, vol. 20, 1959, pp. 459-476 (reprinted in: *The Structure of Russian History*, ed. Cherniavsky, M., New York, 1970, pp. 65-79) を参照のこと。

- (65) Fedorov-Davydov, *Obshchestvennyi stroi*, s. 46; Kuchkin V. A. "Mongolo-tatarskoe igo v osveshchenii drevnerusskikh knizhnikov (XIII-pervaia chetvert' XIV vv.)", *Russkaia kul'tura v usloviakh inozemnykh nashestvii i voyn. Knuchalo XX vv.* Vyp. 1. M., 1990, s. 62, prim. 61.

- (64) PSRL. I:473. 元々Fennell, *The Crisis of Medieval Russia*, p. 107-108 のこの「皇帝」をキプチャク・カン・ムン・ツング。

- (65) Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 160.

- (66) Tolochko A. P., *Knizh' v Drevnei Rusi: vlast', sobstvennost', ideologiya*. Kiev, 1992, s. 111.

- (67) ちなみに『ラウレンチー年代記』と同じく一四世紀の作である『ノヴゴロド第一年代記(古輯)』六七五〇〜一二四二年(NPL. 79)も、ツァをツァーリと表わしている。

(68) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 51; Spuler, *Die Goldene Horde*, S. 33-52; Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 70f, 151-164; ドーソン（佐口透訳注）『モンゴル帝国史』（平凡社、一九七一年）第一、三、五章を参照。

(69) 一九四〇年に出た *Mongoly i Rus'*（研究自体は一九二四年に開始された）においては、上に記したように、『ウスチュグ年代記』など後代の年代記の記述に依拠していたナソーノフも、その後は A・A・シャーフマトフの研究を考慮にいれつつ、この点につき態度を変え、後代の年代記の利用については慎重になってゐる。Nasonov A. N., *Istoriia russkogo leopisanita XI-nachala XVIII veka*, M., 1969, s. 21.

(70) 『アレクサンドル・ネフスキー伝』には邦訳がある。中村喜和編訳『ロシア中世物語集』筑摩書房、一九七〇年、二四〇―二五一頁。執筆年代については、多くの研究者は一二八二―八三年と考えるが、最近クーチキンは一二六四年頃、つまりネフスキー没後直後を主張している。Kuchkin, "Mongolo-tatarskoe igo", s. 36-39.

(71) Vernadsky, *The Mongols and Russia*, p. 160.

(72) Safargatiev M. G., *Raspad Zolotoi Ordy*, Saransk, 1960, s. 51 もこれとの関連で、ナソーノフが、このころ出現したバスカクがベルケではなく、カラコルムの大カーンに従属したとするのを、根拠薄弱として批判している。

ここでソヴィエト史家のなかでも、とくにアレクサンドルの伝記的研究に従事したバシュートの見解にふれておく。かれは一二六二年のタタール税徴収請負人が大カーンのクビライから派遣されたと考ええる点では、ナソーノフに従っている。ただかれは、蜂起は民衆の「憎むべき徴税請負制度」にたいする不満からおこったもので、アレクサンドルがそれに関与したり、ましてや指導したのではなかったと、考えている。また当時のキプチャク・カン、ベルケは大カーン・クビライの帝国本国から明白に自立的態度をとり始めており、その意味でも、アレクサンドルは、蜂起にたいするカンからの懲罰はないという期待

感を抱きえたが、それを確実なものとするべく、そしてルーシの民の請負制度にたいする将来の不満の爆発を事前に予防すべく、サライに赴き、カンらに、タタール税徴収業務をルーシ諸公自身の手に移すよう説得しようとしたのだ、とするのである。Pashuto, V., *Aleksandr Nevskii*, M./Ekaterinburg, 1995, s. 137-138, 144. ただし、タタール税徴収権のルーシ諸公への引き渡しに関するかれの見解は、独特というか、あまり説得的ではない。通常引き渡しの時期はずっと遅く一三世紀末、あるいは一四世紀になってからのことと考えられているのである。この点について詳しくは、拙稿「キプチャク・カン国のルーシ支配の構造」を参照されたい。

(73) PSRL. VII:163. (『オスクレンスカヤ年代記』)

(74) Nasonov, *Mongoly i Rus'*, s. 52-53.

(75) それにしてもカンは何故懲罰軍を送ってルーシを懲らしめなかったか。クリヴォシェエフはこう問い、それにたいし、蜂起は結局のところ、後のたとえば一三二七年のトヴェリ蜂起などと比較して、そう重大なものではなかったから、と答えるが、はたしてそうであろうか。一三二七年との比較などはここではまったく無意味であろう。タタール側は何らかの絶対的判断基準などもっていなかったであろうから。Krivoshchev, *Rus' i Mongoly*, s. 199. またエゴロフは、これをネフスキーの巧みな外交術によって説明しているが、それは何でもネフスキーの功績にしようとする、史料に基づかない誤った英雄崇拜史観である。Egorov, "Aleksandr Nevskii", s. 55.

(76) PSRL. VI:337. やらば PSRL. XXXIX:89 (I・N・ツァールスキー写本による『ソフィヤ第一年代記』) をも参照。

(77) 中村編訳『ロシア中世物語集』二五〇頁。

(78) PSRL. XXV:144.

(79) PSRL. XXV:144.

(80) 研究史的にいえば、ネフスキーや諸公の蜂起への関与を主張するのは、ナソーノフやそれをうけいれるクーチキン Kuchkin, "Aleksandr

Novskii-Gosudarstvennyi deiatel' i polkovodets srednevekovoi Rusi', Otechestvennaia istoriia, 1996-5, s. 29)である。これにたいしグレコフ、パシュート、フェンネルらはネフスキーらの関与を認めていない。(ヤクボフスキー、グレコフ『金帳汗国史』一三三六—一三三頁。Grekov i Yakubovskii, *Zolotaia Orda*, s. 171-172; Pashuto, *Aleksandr Nevskii*, s. 137; Fennell, *The Crisis of Medieval Russia*, p. 119)ブドーウィッツ、カルガーロフらは、いかにもソヴィエトの研究者らしく、諸公や貴族ら支配階級は自己の特権的地位と利益を守るためカン権力に従う立場をとったとするが、一二六二年蜂起に関して具体的には述べていない。Budovinis I. U., *Obshchestvenno-politicheskaia mysl' Drevnei Rusi*, M., 1960, s. 354; Kargalov, *Vreshnepoliticheskie faktory*, s. 148-154.

(18) 一二六二年の蜂起に関する史料の記述はほぼ以上に尽きるが、クリヴォシェエフはさらに『聖パフヌーチー・ボロフスキー伝』と『ヴォロコラームスキー・パチェリク』によって知られる、いわゆる『パフヌーチー・ボロフスキー物語』を蜂起の史料として利用しようとしている。これはかつてA・A・ジミーンが一四世紀二〇年代の蜂起(一二三〇年のロストフ蜂起および一二三七年のトゥヴェーリ蜂起)の史料として利用したことで知られているが、クリヴォシェエフはむしろ一二六二年蜂起の様相を伝える史料と考えるのである。かれの試みが成功しているかどうか判断しがたいが、いずれにせよ両文献が事実そのものの理解にどの程度資するかは疑問である。たとえば、クリヴォシェエフは『パフヌーチー伝』や『パチェリク』が『ウスチュグ年代記』と同様に、諸公の蜂起への関与について言及することに注目しているが、諸公の関与については、上に示したように、事実かどうかは何とも言えないのであり、これをもって両文献が一二六二年蜂起の史料であるといえるかどうかは疑問が残る。Krivoshchev, *Rus' i Mongoly*, s. 199-205. またクリヴォシェエフ (ibid. s. 206) は『ニコン年代記』の記事を蜂起の現実をよく伝えるものとみているが、はたしてどうであろうか。この年代記についてはより慎重になる必要があるように思わ

れる。少なくとも、その編纂年代から遠く遡る早期の時代に関わる記述については、十分な注意が必要である。『ニコン年代記』の成立、構成、またそれをめぐるその他の諸問題については、Kloss B. M., *Nikonovskii svod i russkie letopisi XVI-XVII vekov*, M., 1980 及びこの書に関して論じた、田中陽児『ニコン年代記』とダニール府主教』『紀要』(東洋大学文学部)・史学科第三六集VIII, 1-38頁を参照。(ただし田中論文は、田中氏の主たる関心が年代記の文献学・古文書学的ないしそのテキスト批判的研究といった側面にはないので、クロスの研究そのものに然るべき評価を与えるものとはなっていない。)